

特集

もう一歩 踏み込んで 需要をつくる

現在、「仕事がない」という声がちまたにあふれている。旧来の仕事に頼っているままでは生き残れないのは、どの企業にも共通した悩みだ。では、どうしたら新しい需要を創造できるのか？ 今号ではこのテーマに挑戦した会社を取り上げた。

取材・清水 高
山田清志
関根利子

「真つすぐ」から「くねくね」へ 意外性と機能性で市場を切り開く

クネット・ジャパン
長崎・佐世保市

手すりと言えは、真つすぐが常識。それを「波形」に変形させたところ、握ったときの手首の角度が自然で力が入れやすく、滑りにくくなった。そんな機能が徐々に認知され、現在、日本各地の駅や公共施設、百貨店などでの利用が急速に広がっている。固定観念にとらわれないひらめきが、思わぬビジネスチャンスを生み出した。

真つすぐな手すりでは役に立たない

「くねくね」と曲がった手すりをこ存じだろうか。見たことがあるという人は、最初「なんだこりゃ？」と思ったことだろう。

見た目はユニークだが、実際に使った段階を上り下りしてみると、従来の手すりとの違いがよく分かる。まず、上るときは縦の部分が取っ手のような役割を果たし、体を引っ張り上げやすい。下りるときは水平の部分がつえのように体を支えてくれる。握ったときの手首の角度

に無理がないため、力を入れやすく、滑りにくくなっており、手すり本来の機能がパワーアップされているのだ。

この波形の手すりを発明したのは、長崎県佐世保市にある小さな工務店の経営者。約6割の人が傾斜地に暮らす坂の多い同市で、ある日急こう配の階段に手を付き、這うようにして上がっているお年寄りの姿を見て、「せっかく手すりが付いていても何の役にも立っていない」と感じたのがきっかけだった。そこで、もっと使い勝手のいい手すりをつくってみよう、と手の動きや握るときの角度を研究。階段の形に合わせて曲げることを思い付いた。

日本の階段の平均サイズが蹴上（1段の高さ）15cm、踏面（1段の水平部分）25cmであることから、曲げる角度を計算。さまざまな実験を繰り返した結果、最終的に波形の山から山までの長さを28・28cmとした。これが急こう配な階段にもなだらかな階段にも適合する



トイレなどの狭い場所用につくられた「クネット・ミニ」。カラフルな色合いが生活空間をポップに演出

従来品を前に苦戦

くねくね曲がっているから「クネット」と名付けられた波形の手すりは、当初、佐世保港湾運輸という地元企業が新事業として販売

することになった。そのときマーケティング担当として参加したのが、現クネット・ジャパンの副社長・古賀勝彦さんだ。古賀さんは地元元テーパーク・ハウステンボスの元

特 集
もう一歩踏み込んで
需要をつくる